

radical chic

崩壊期にある資本主義システムを清算する 新たな政治主体を大胆に構想しよう！

終わらない戦争と 「資本主義の終焉」

戦争が終わらない。ロシアによるウクライナ侵攻が始まってからすでに一年近くなるにもかかわらず、今の瞬間も戦争は継続している。戦争が長引けば、当然その犠牲者も日ごとに増える。

ところで、「資本主義の終焉」という言葉がよく聞かれるようになって久しい。「もはや地球上のどこにもフロンティアが残されていないからである」、例えば水野和夫はこのように言う。資本主義的世界システムは「中心」と「周辺」から構成され、先進国である「中心」がフロンティアとしての「周辺」を拡張していくことで「中心」が利潤率を高め、資本の自己増殖を推進していくシステムである。だが、グローバル化・シオンの急速な進展によって地球上にはもはやフロンティアはなくなってしまった。かつて搾取・収奪の対象だった「周辺」諸国が新興国とな

り、さらなる「周辺」の開拓がとうとうアフリカにまで到達してしまっただのが現在の状況である。もちろんその過程で自然破壊も深刻化し、コロナ・パンデミックもこうした開拓の結果である。

資本を投下し利潤を得て資本を自己増殖させるというのが資本主義の基本的な性質なのだから、日本をはじめ先進諸国で長らく続く利潤率＝利子率の低下は、すでに資本主義が資本主義として機能していないことを示している。利子率＝利潤率が2%を下回れば、資本側が得るものはほぼゼロであり、そうした超低金利が十年以上続けば、既存の経済・社会システムはもはや維持できないというところだ。

しかし、こうした傾向はすでに一九七〇年代から見られ、「地理的・空間的なフロンティアがダメなら」ということで生み出されたのが、電子・金融空間である。以後、金融資本主義が世界を席卷していくことになったが、二〇〇八年のリーマンショックにより、歯止めなく膨張す

るこの資本主義の脆弱性と危険性が白日の下にさらされた。金融資本主義も資本主義である限り、中心が周辺から搾取・収奪することで利潤を獲得するというものでは以前と変わりが無い。

それゆえ物理的空間の差異を考慮する必要がない金融資本主義は、国内にも「周辺」を作り出していく。その犠牲となったのが、米国ではサブプライム層、日本では非正規雇用者層であり、ここに格差社会が生み出される。利潤を引き出すことが困難となった状況の中で無理に引き出すとすれば、「周辺」からの搾取・収奪は苛烈を究めていく。こうした状況の中、コロナ・パンデミックの直前には世界各地で民衆蜂起が起こっていた。

水野は数百年単位で考えているようだから、「資本主義の終焉」といつても今すぐの話ではない。しかし、ここで見失われているのは、苛烈を究める民衆からの搾取・収奪も、資本主義が続く限り続き、しかも末期に近づくにしたがって利潤も引き出

しづらくなるのだから、尋常ではなくなってくるということだ。その現われが戦争である。

戦争が起こり、長引くほど利益を得られるのは軍事産業である。生産消費というサイクルが回らない限り経済活動は止まってしまおうが、軍事産業における消費という契機は戦争である。戦争によって武器の在庫一斉セールの定期的に行ってきたのが米国であり、これを現在ウクライナで実行しているということである。戦争が長引くほど、武器の消費と生産のサイクルは回転し、軍事産業は利潤を得るのだが、しかし軍事産業など現行の経済システム全体から見ればほんの一部にすぎない。

資本主義経済全体の停滞が避けられないとすれば、限られた権益を巡る帝国主義国間の争闘戦は激化せざるを得ない。事実上この戦争を後押しする米国が狙うのは、「経済制裁」を口実としながらEU経済、特にドイツとロシアの間に楔を打ち込むことであり、エネルギー資源を中心にして自国に有利な構造を生み出そう

としているのが米国の目論見である。もちろんこれには一定の時間がかかる。だから、戦争が終わらないのだ。

資本主義が終焉に近づくほど民衆からの搾取と収奪は苛烈を究めていく。資本主義末期の世界に生きる民衆は労働力を搾取されるだけでは許されず、命をも資本に奪われなければならない。これが今ウクライナで起こっている事態である。新自由主義では資本主義の延命を図れない、民衆の命もろとも収奪していくこと、これが終末に近づいた資本主義の現状であり、この趨勢に遅れまいとしているのが、日帝岸田政権である。

戦争となれば犠牲になるのは民衆である

ウクライナにおける戦争は両陣営とも一進一退の状況が続く。十月十日、ロシア軍は、クリミア橋爆破の報復ということで首都キーウを含むウクライナ全土のインフラ施設に標的を拡大してミサイルなどで攻撃、ウクライナ側の発表によれば民衆の二十一人が死亡、数百人以上が負傷した。そうした中、十一月月上旬にはロシア軍は南部ヘルソン州の州都ヘルソン市を含めたドニエプル川西岸からの撤退、ウクライナが当該地域

を奪還した。とはいえ、ロシア軍の攻撃が止まるわけではなく、エネルギー施設等のインフラに対する集中的な攻撃は現在でも続く。極寒の冬の中、ウクライナ民衆を兵糧攻めにする作戦である。

しかし苦境に立たされているのはウクライナ民衆だけではない。十一月二日、動員された予備役らの一個大隊がウクライナ東部でウクライナ軍の標的となり、多数の死傷者が出たとされる。まさに「防衛の肉弾」、捨て駒である。片や、ロシア国内では動員を拒否すれば投獄である。

そのような中、十一月十五日、ウクライナ国境に近いポーランド東部にロシア製ミサイルが着弾、二人が死亡、世界を震撼させた。NATOは設立条約五条で、加盟国が武力攻撃された場合、必要と判断すれば集団的自衛権を行使すると定めている。ロシアによるポーランドに対する攻撃であると見なされれば、NATO軍とロシア軍の全面戦争、第三次世界大戦となる。ゼレンスキーは最初から「ロシアの攻撃だ」と決めてつけてポーランド、バルト三国、チェコなどの東欧諸国と共にNATO軍の介入を画策したが、G20でインドネシアにいたバイデンが「ロシアのミサイルではない」と発言。結局、ポーランド大統領が、ウクライナ軍がロシア軍のミサイル迎撃する

ために発射したミサイルが落下したものだとし、危機は回避された。しかし戦争が続く限りこうした危険は常に付きまとう。それに加え、プーチンはあることに核兵器の使用に言及する。ウクライナという極地で行われている戦争だから、などとは言っていられない。

戦争が続く(続けられる)のは、米国のほじめNATO諸国がウクライナに兵器を供与するからだ。その米国では中間選挙が行われた。

米国中間選挙における若者たちの台頭

米国中間選挙は現職大統領の政策が評価される場と位置付けられているため、与党に厳しい結果が出る傾向がある。今回も事前予想としては民主党の苦戦が報じられていたが、上院は民主党が多数派を維持、下院は共和党が過半数を得たものの微増だった。共和党は記録的なインフレを引き起こしたのはバイデン政権の経済政策が原因であることを最大の争点として掲げたのに対して、民主党は人工妊娠中絶問題や民主主義の在り方を掲げた。そうした中、トランプ前大統領が選挙結果が出る前に次期大統領選に出馬することを表明、これが国民の多くに危機感を持

たせてしまった。確かにトランプ政権時には米国は他国と戦争を行うことはなかった。だが、国内に分断を持ち込み、自国民同士で憎しみ合う事態を大統領が率先して作り出していた。米国民のかんりの割合が近年中に内戦の勃発を危惧するという世論調査結果もあるようだ。中間選挙で勢いを得たトランプが再び政権の座に就き、国民が危機感を覚えたのだろう。ここで大きな役割を果たしたのが、若者層であることは特筆に値する。若者たちの政治参加が米国という大国の政治をも動かすのだ。

しかしバイデン政権が続く限り、国内的には一定の平和が実現するかもしれないが、国外においては戦争が引き起こされる。国民統合のための戦争、従来の米国の手法が踏襲されるのだ。米国には常に「敵」が必要なのだ。その標的となっているのが現在では中国である。

十月三十日バイデン政権は「国家安全保障戦略」の中で中国を「国際秩序を変える意図と能力を備えた唯一の競争相手」と位置づける。

中国の独裁体制と民衆の声

中国では十月十六日から第二十回党大会が開催され、習近平総書記は、

独自の発展モデルとして「中国式現代化」を推進し、欧米主導の中国封じ込めに挑戦する姿勢を鮮明にする。と同時に、最高指導部を側近で固め、第三期目の体制を発足させた。これによって集団指導体制は消え、事実上の独裁体制を築き、四期目以降の終身制も視野に入れたことになる。

また、高い経済成長が見込めない中「強い中国」が強調され、「中華民族の偉大な復興」を掲げナショナリズムが鼓舞される。台湾統一はその最も重要な要素であるとされた。

その台湾においては、十一月に総選挙の前哨戦とされる統一地方選が行われ、中国との対立を鮮明にしてきた与党民進党が大敗し、蔡英文総統は党主席を引責辞任した。統一地方選が中央選挙に直結するとは限らないと言われるが、現政権がコロナ政策では一定の成果を残したにもかかわらず、必要以上に米国と結託して軍事緊張を煽り中国に敵対する政策に台湾世論が疑問を呈した結果ではないか。

専制国家と喧伝される中国においても、十一月の下旬には政府のゼロコロナ政策に対して北京や上海など各地で抗議するデモが起こった。しかしそれ以上に注目しているのは十月の党大会直前に北京市内で敢行された一人のエンジンニアの抵抗行動だった。彼は四通橋の上で「PCR

検査は不要、ご飯が必要・・・領袖は不要、選挙が必要、奴隷は不要、公民が必要、「学生と労働者のストライキで独裁者・国賊の習近平を罷免せよ」の横断幕を掲げた。彼はその日に逮捕されたが、横断幕の映像は中国内外にSNSで拡散された。ゼロコロナ政策の転換を巡る中国国内の混乱、極端なロックダウンに対する民衆の不満の蓄積は、中国の党和国家資本主義の権威主義独裁システムの機能不全を示すものであり、矛盾の表れと言える。

この数か月間、朝鮮民主主義人民共和国(以下「朝鮮」)によるミサイル発射実験が尋常ではない数に上っている。十二月末段階で実に三十七回を記録する。十一月二日、米韓空軍の大規模訓練「ビジラント・ストリーム」に反発し、朝鮮は大陸弾道ミサイル(ICBM)や地对空ミサイル計三〇発以上を発射、訓練最終日には黄海に向け短距離弾道ミサイル四発を発射した。金正恩朝鮮労働党総書記は「核には核で、正面対決には正面対決で答える」と表明する。日米韓は十一月六日、日本海の公海上で朝鮮の弾道ミサイル迎撃を想定した共同訓練を行った。

相次ぐ朝鮮のミサイル発射実験、中国の脅威(台湾有事)、そしてロシアによるウクライナ侵攻を受けて、国民の不安を煽りながら、突如

日帝岸田政権は「敵基地攻撃能力(反撃能力)の保有」を打ち出した。

敵基地攻撃能力保持の虚妄性

元首相の銃殺という前代未聞の事件によってあぶりだされた旧統一教会と自民党議員の癒着(と不祥事)は閣僚の辞任ドミノを生み出し、内閣支持率を急速に低下させた。それに加え、アベノミクスの「遺産」である金融緩和・低金利政策への固執必然的に招いた円安によって世界的な物価高に拍車がかかり、国民の暮らしと経済を直撃。岸田内閣支持率低下が止まらない。

そこで打ち出されたのが、「敵基地攻撃能力(反撃能力)の保有」である。「NATO並みGDP2%」と防衛費増ありきで始まった議論は、終始「増税問題」として語られた。人々の生死を決する軍事問題であるにもかかわらず、これがカネの問題として語られたのである。

敵基地攻撃能力の保有は、言うまでもなく中国や朝鮮の軍拡、軍事技術の発展による脅威への対抗を大義にする。核に加えて迎撃が難しいとされる「極超音速ミサイル」などの開発の進展により一層の抑止力が必要というに留まらず、米国だけでなく日本からも反撃を受けるとなれば相手側の戦略計画を複雑にし、その

分抑止力が向上するはずだということのようだ。

しかしミサイルが移動式の車両や潜水艦から発射される現代は標的を正確に把握しづらく、司令部も強固な地下施設などで破壊が困難なうえ、戦闘機の滑走路にミサイルを打ち込んでも一日で修復される可能性すらある。どれだけミサイルを配備しても十分な抑止力とはならず、現実には脅威と軍拡のエスカレーションを招き、偶発的な軍事衝突の可能性すら高める。

そもそも、朝鮮の度重なるミサイル演習自体が日米韓三国軍事体制化に対するけん制であり抑止力の誇示に他ならない。

間抜けなJアラートシステムを含むむミサイル迎撃態勢の不十分さ故の敵基地攻撃能力の獲得ということなのか。だが中国や朝鮮には相当数のミサイル施設があり、すべて一気につぶせなければ、報復攻撃を受けるだけで、何の抑止力にもならない。そのとき犠牲になるのは自衛官だけではないことは言うまでもないが、民間人防護の議論はほぼない。

端的に言って敵基地攻撃能力の保有では国民は守れない。それどころか不必要な緊張を東アジアに生じさせ、民衆をさらなる危険にさらすことになる。そこで犠牲の矢面にされるのはまたしても沖縄だ。

地上発射型の十二式地对艦ミサイル(SSM)が陸上自衛隊宮古島駐屯地にはすでに配備され、本年度末に開設される石垣駐屯地(仮称)、二三年度にも勝連分屯地(うるま市)に配備が予定され、与那国島には監視部隊・電子線部隊に加えてミサイル部隊の配備も計画されている。また陸上自衛隊那覇駐屯地に拠点を置く第十五旅団の部隊が増強されようとしている。しかし、国会における議論もなく、敵基地攻撃能力の保有を含む、国家安全保障戦略など安保関連三文書の改定は閣議決定が強行された。

しかしこうしたことは岸田首相もよくわかっているのではないか。実質的には役に立たない敵基地攻撃能力の保有を進めたのは、戦争を媒介しながら新たな世界経済秩序を再構築しようとする米国の戦略に乗るためであり、防衛費を増額することで米国製の武器を大量購入し、米国の機嫌を取るためである。岸田には軍隊が人殺しの道具であることが見えていない。

たとえ一国の切羽詰まった経済的な事情から荒唐無稽に防衛力を増強しているに過ぎず、当の岸田自身が戦争を起そうなどと微塵も思っていないとしても、それを向けられた方は、決してそうは受け取らない。だから「戦争など起きない」と思い

込んでいる中で戦争は勃発するというのが歴史の教訓である。

こうした中、防衛省が人工知能(AI)技術を使い、交流サイト(SNS)で国内世論を誘導する工作の研究に着手したことが判明した。インターネットで影響力がある「インフルエンサー」が無意識のうちに同省に有利な情報を発信するように仕向けられ、有事で特定国への敵対心を醸成、国民の反戦・厭戦の機運を払拭したりすることを目標にする。

東西冷戦体制の中、ソ連東欧諸国の民衆は言論統制され、当局による監視と密告の中におかれていたが、しかしベルリンの壁は民衆の手によって破壊され、社会主義圏は崩壊した。国家によってどれだけ管理・統制されようと、民衆の生命力はそれを乗り越えていく。そのとき先頭に立ったのは若者たちである。厳しい状況の中、現在のロシアや中国でも反政府運動を展開する人々がいる。米国中間選挙でも情勢を動かしたのは若者たちである。それゆえわれわれに課された任務は、日本における若者たちの決起を促し物質化することである。そして国家がどのような介入をしても揺らぐことのない、世代を超えて引き継がれ、沖縄民衆の中に刻まれた戦争の記憶と反戦行動に寄り添いながら、これを進めていくことである。(幾瀬仁弘)

【映画評】

『ザリガニの鳴くところ』

ザリガニは本当に鳴くのだろうか？

動物学者でもある米国の作家

デイリー・オーエンズの小説『ザ

リガニの鳴くところ』を実写化した

映画。原作は二〇一九年、二〇二〇

年に米国で最も売れた小説であり、

日本でも二〇二一年の本屋大賞翻

訳小説部門第一位を獲得している。

この映画のジャンルは、一応ミス

テリーとされているようだ。幼い

うちに家族に捨てられ、ノースカ

ロライナの湿地帯の家で、たった

一人で育った少女が殺人事件の容

疑者となり、法廷でその壮絶な半

生が明らかにされる。少女が容疑

をかけられたのは果たして本当に

殺人事件だったのか、それとも事

故だったのか、その真相は明らか

になるのか、という内容は、確か

にミステリーやサスペンスを思わ

せる。しかし実際は、孤独な少女

をめぐる愛の物語だと思える。

映画は冒頭、湿地帯に建つ湖畔の

家の庭で、絵を描く母親と二人の姉

仲の良い兄と仲睦まじく過ごす6

歳の少女・カイアの楽しげな様子

を映し出す。しかし、しばらくし

て現れた父親は、子どもたちを怒

りつけ、妻にひどい暴力をふる

う。毎日父親の暴力におびえなが

ら暮らす家族、耐えられなくなっ

た母親は、ある日子どもたちを残

したまま、スーツケース一つを持っ

て家を出ていく。やがて姉二人が

消え、いつも離れずに過ごしてき

た兄も、「父親から逃げるときは、

ザリガニの鳴くところまで逃げろ。

これは母さんの言っていたことだ」

と言いつつ出ていく。しばらく

二人で暮らしていた父親も出てい

き、幼いカイアは一人家に残され

る。カイアは町の住民から「湿地帯の

娘」と呼ばれ、疎まれ、蔑まれて

学校に行くこともできない。母が

絵を描いていたように、湿地帯の

動植物を細密にスケッチし続ける

少女は、ある日湿地帯で出会った

少年・テイトから、文字を習い始め

やがて、成長した二人は恋に落ち

る。しかしテイトは大学に行くため

出版社にカイアの描いたスケッチ

を送れば、必ず認められると、出

版社の連絡先を書いたメモを残し、

町を出ていく。独立記念日には必

ず帰ってくるというテイトはし

かし戻って来なかった。悲嘆にくれ

人間不信に陥ったカイアは、ふと

したきつかけで出会った町の名家

生まれの青年・チェイスに口説かれ

恋なのかどうかもわからないうち

に、関係を持つようになる。

一人住む残された家がホテル業

者に目をつけられたカイアは、家

を奪われないように滞納した税金

を払うため、テイトが残したメモ

を頼りに出版社に湿地の動植物の

スケッチを送る。スケッチは出版

社に絶賛され、出版を果たしお金

も手に入れる。そうした中、結婚

しようと言っていたチェイスには

実は婚約者がいたことがわかる。

怒ったカイアに別れを告げられ

たチェイスは、カイアに未練を持ち

た彼女に暴力をふるった上、レイプ

しようとする。さらに留守中のカ

イアの家に忍び込み、彼女の描い

た数々のスケッチをずたずたに引

き裂く。そんな中、町の動物研究

所に就職して戻ってきたテイトと

カイアは再会する。再び惹かれあ

う二人。

罪で逮捕する。カイアは小さな頃

からカイアを知る弁護士に、「無罪

でも死刑でも私はこの留置所から

すぐに出ていく」と言い放ち、法

廷での証言を拒否する。カイアを

差別と偏見の目で見ると町の間が

陪審員を務める法廷は、どのよう

な結論を出すのか、そして事件の

真相は。

これ以上の描写はネタバレにな

るので、やめておこう。

物語は湿地と近くの海岸、狭い

田舎町のしかも一部という、狭い

範囲で進行していくが、描かれる

自然は美しい。緑の大きな沼と、

そこに生きる鳥や昆虫などの映像

懸命に生きる主人公と少年の恋も

美しく描かれる。カイアの唯一の

理解者である町の雑貨屋の夫婦の

やさしさにほっとさせられる。そ

れでも、スクリーンからは常に緊

迫した雰囲気醸し出されている。

湿地で捕食するもの、されるもの

についての言及がある。被捕食者

の逆襲についての会話がある。自

然界には善も悪もないとカイアは

言う。鳴かないはずのザリガニが

鳴くというのは、深い自然界への

暗喩だろうか。

原作者は一九四九年生まれとい

うから、日本の団塊の世代とほぼ

同世代だ。動物学者としてアフリ

カで保護活動に携わっていたこと

もあるという。どのような考えの

持主かは知らないが、映画は五十

年前のアメリカを舞台にしなが

結局はジェンダーに関わって、D

Vに抗う女性の一生を描いたとも

見える。

原作は未読だが、映画の脚本に

は様々な突っ込みどころがある。

なぜ、家族は普通なら一人で暮ら

すことが不可能な末っ子を置いて

いったのか。幼い少女ほどのよう

にして衣食住を賄い、成長してい

たのか。ミステリーとしてみると

き、そうした点に不満が残るだろ

う。だが、寓話としてみれば気に

ならない。不器用な恋をするカイ

ア絶望の中にいるカイア、凛とし

てアの様子は、とても美しい。そ

して最終盤に向かって張られる伏線

は含みがい。

映画の良し悪しの判断は、多分

に主人公にどの程度感情移入でき

るかにより決まってくる。これを

書いているのは公開から間もない

時（公開日は十一月十八日）だが、

あまり一般受けする映画ではなさ

そうなので、上映期間は短いかも

しれない。しかし、もし観る機会

があったなら、観て損はない、そ

んな映画だと思っ。（あんづれら）